

野幌森林公園のクマゲラ一家

—その三—

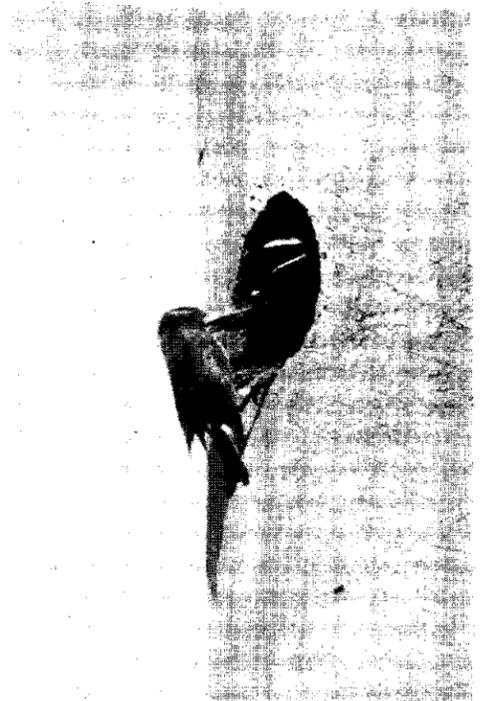
藤村 野
林 忠
紀 雄

一九七七年に野幌で確認されたクマゲラの営巣は二組で、それぞれから三羽ずつの雛が巣立った。このうちのひとつでは、ムクドリが割りこんで給餌をおこなった。

□ 家族その一（営巣木—シナ）



① クマゲラの親からの給餌



② ムクドリが巣口に止まって餌を与える



③ ムクドリが飛びながら餌を与える



④ クマゲラの親が給餌して飛びたった直後に、ムクドリが餌を持ちこむ

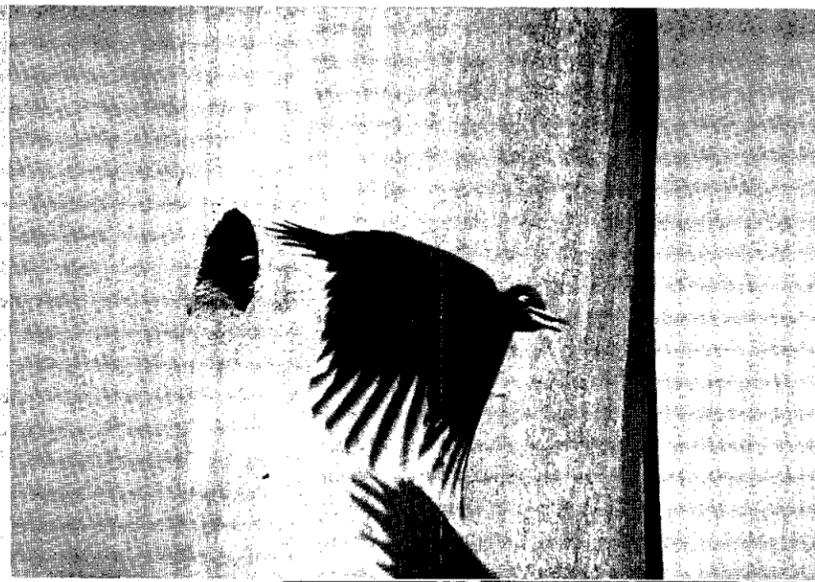


⑤ 給餌に近づく親をムクドリが襲う

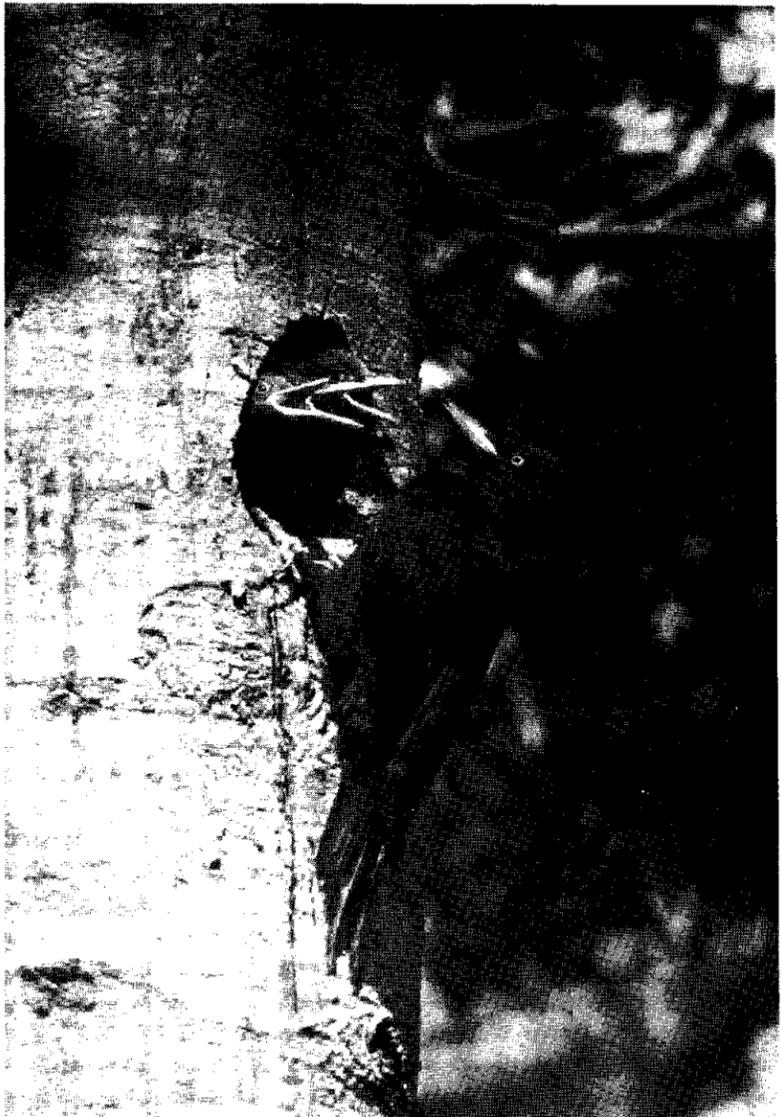
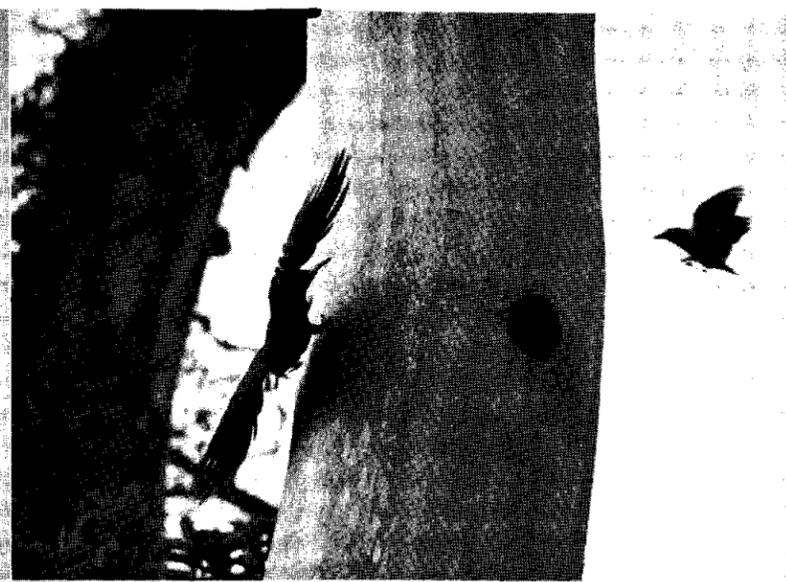
⑧ クチバシに奇形のある雛、黒いこぶの部分から曲っている(親は♂、雛は上から♀♀♂)



⑦ 近くにムクドリがいるため、給餌できずに巣口前を素通りするクマガゲラ



⑥ 給餌に近づく親をムクドリが襲う



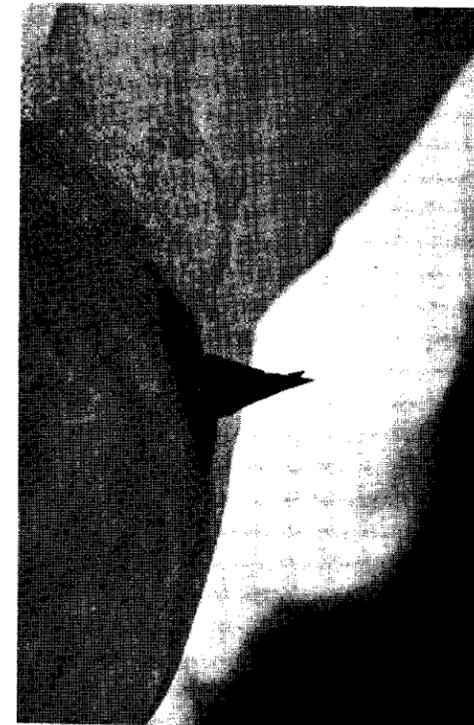
□ 家族その二 (営巣木——トドマツ)
⑩ この一家は静かな環境に恵まれ、表情も落ちついている。(親は♀、雛は♂♂1羽)



⑩ 近くのヤチタモの木から、給餌の機会をうかがうクマガゲラの両親



⑪ 周囲の状況、真ん中の裸木が営巣木で周囲は広葉樹林



⑨ 奇形のクチバシ(上下互いちがいがいになっている)

はじめに 昭和五十年以来「野幌森林公園のクマゲラ一家」、そして「その後」という標題で野幌のクマゲラを紹介してきましたが、今回は、昭和五十二年度中に観察した二家族のクマゲラについて紹介します。この二家族のうちの一つでは、育雛にムクドリが介入して雛に奇形が出たりしたため、すでに新聞や雑誌にその一部が紹介されています。

一、家族その一

—ムクドリが育雛に参加—

(一) ムクドリとの間に起こったできごと
鳥の世界では、自分で営巣しないで種族の違う鳥の巣に卵を生みこみ、養ってもらう習性を持つ鳥がいる。これらは一般に托卵といわれている。ところが今回、クマゲラが産卵、抱卵、育雛に入ったところで、ムクドリが横から割り込んでクマゲラの雛に給餌したのである。なぜ、ムクドリがクマゲラの雛に餌をやるにいたったのだろうか。

まず、こんな風に考えられる。五月の下旬になるとクマゲラの巣造りは一応終わりが完成となる。この完成後の一、二日クマゲラの雌雄とも営巣木から離れるが、このあたりからムクドリがクマゲラの巣に接近していったと思われる。自分たちの巣として

使おうとしていたのか、あるいはこの時点でムクドリが産卵したのかも知れない。一九七七年六月十二日に、クマゲラの親鳥が嘴に小枝状(あるいは、藁らしい)のものをくわえて巣穴から出てきて飛んでいったのを目撃する。これと前後するが、六月六日にはムクドリが小枝状のものをくわえて巣穴に入ったのを観察している。

このほかに、六月九日にはゴジュウカラがやはり樹皮状のものをくわえて、巣口に持ち込んだこともあった。普通、クマゲラの巣造りは早朝から午後三時ころまでであるが、巣が完成するころにはクマゲラの雛は巣を守るようになり、時としてつかいだす。採餌以外は、昼夜にわたって営巣木を守るようになる。しかし、ムクドリもクマゲラのわずかな留守をついて、巣材を運びこむ機会がいくらかもある。

六月三日の観察ではムクドリは盛んにクマゲラの雛に餌を与えており、クマゲラの親鳥が給餌に戻ると、これを阻止する行為(完全攻撃態勢)をする。クマゲラの雌親はなんとか中継地点の木から、巣穴へ飛び込むようにスポツと入っていくが、雌親はなかなかこれができない。クマゲラの雛はクマゲラの親から餌を充分に与えられ空腹が満たされると、巣孔内に潜って静かになる。しかし、それも約一五分から二十分く

らい経過すると巣口に這い上がってきて、さかんに餌をねだる。雛は生長するにしたがって餌の催促も激しくなり、ムクドリの運んでくる少量の餌では、とても満足しなくなる。

しかし、クマゲラの親が給餌をした直後は、ムクドリは餌はあまり受けつけず、巢外へ落す状況がしばしば見られた。いよいよ腹が減ってくると、ムクドリは運んでくる餌でも良く食べるのである。そして近くの枝で羽づくろいをしたり伸びをしながらムクドリは、クマゲラの雛の鳴き声、嘴の大きくあけた赤い口を見ると狂ったように餌を採りに行き、早いときは二、三分おきに巣口に舞い戻ってくるのがよく見られた。

(二) 周囲の状況

営巣木(シナノキ)は、立ち枯れて樹皮は完全に剝げ落ちており、樹高約二七m、幹回り約三mで地上から巣口までの高さ一〇mくらいである。また営巣木を中心にみて次のような植生が見られた。

ハンノキ、ナナカマド、ホオノキ、ミズナラ、トドマツ、ハルニレ、ヤチダモ、エゾイタヤ、エゾイヌガヤ、ノブドウ、ツタウルシ、コクワ、タラノキ、チシマザサ、クマイザサなど。また、クマゲラの営巣木近くで良く見かけた鳥としては、キジバトがあげられる。営巣木のある林帯の裏側に

当たるところには農耕地があり、絶好の採餌場としていたようだ。次に巣の周辺にはアカゲラ、ヤマゲラがしばしば姿をみせていたが、これらはクマゲラの雛を育雛したムクドリの攻撃的となり、営巣木周辺にくるとたちまち撃退されていた。このほか上空はアオサギの採餌コースになっているらしく通過してゆく姿が良くみられた。また高所においては円を描いて旋回するトビ、トビを攻撃するカラスなども散見された。

営巣木近くで見られたものには次のような鳥たちがいた。シジュウカラ、ハシブトカラ、ゴジュウカラ、センダイムシクイ、キビタキ、アオジ、カワラヒワ、シメ、クログミ、カケス、イカル、カツコウ、この他に鳴き声だけのものにウグイス、エゾセンニュウ、エゾライチョウ、ヤブサメ、ツツドリ、アオバト、トラツグミなどがいた。なお営巣木は南北の両側をトドマツの若い造林地に挟まれた細長い天然林帯であった。そして巣口の左右および前方はほとんど見晴らしのきく、広い植林地になっており、二m前後のトドマツが前記のような植生の中に整然と植えられ、その北方向には壮年の針広混交林があった。

(三) 巣造りからふ化まで

巣造りに入ると急激に営巣木周辺が騒々

しくなるのが常である。巢口が掘げられクマゲラの上半身が入るかはいらぬうちに、この巢を横取りしようとする鳥たちが巢の出来くあいを偵察にやってきた。ムクドリ、ゴジュウカラが圧倒的に多く、まれにコムクドリがやってくることもあった。クマゲラが産卵、育雛に入ると次に恐い存在となるのが、カラス類、ヘビなどで、親はいつときも巢を留守にできなくなった。

なお巣造中のクマゲラを発見したのは、四月十日であった。この時の確認者によればすでに巢口はかなり広げられ、クマゲラの上半身が入る程度まで掘り進められていたという。少なくともこの一〇日くらい前から、巣造りが開始されていたと推測して良いのではなからうか。また、過去三年間の野幌でのデータを確認してみると、あとで確認された本巢の巣立ち六月十四日、十五日から逆算して、ふ化は五月の二十日ころ、産卵は五月六日前後とみられる。また巣造り開始は四月一〜三日ころと思われる。四月二十一日には、すでにポツカリと穴があき、巢孔内で雄のクマゲラが縦穴を掘っているのが観察されている。

四 クマゲラを育てるムクドリ

五月七日、もしかしたら巣造りを放棄してしまっただけではないかと思うほど静かな状況のなかで巢口の六、七mほど上にムク

ドリのつがいがいるのを観察した。それはのちに、クマゲラの雛に給餌をしたムクドリとは関係のないものであった。六月初旬に子育てのムクドリが現われてから、にわかクマゲラの営巣木近くの様子が一変してしまっただけだ。

最初ムクドリのつがいで何日か一緒に給餌していたが、そのときは給餌回数が極端に増加しクマゲラの雛がムクドリ夫婦の運んでくる餌を全部受けつけるというのではなく、クマゲラの親鳥が給餌したときなどはあまり受けつけなくなつた。親鳥が数時間留守にすると、巢口でジャージャーと大きな声で鳴きわめく。これを聞きつけて営巣木の近くで休んでいたムクドリは、急に慌ただしく餌を運ぶのである。巢口より二、三mほど離れたところでフライイング、キャッチで餌を取ったり、二、三分おきに巢口に現われ、クマゲラの雛の口におそるおそる餌を押し込めるように給餌するが、これがなかなか上手にできず、餌を地上に落としたり、またクマゲラの雛が餌を拒否するの、地上に落としてしまうことがしばしば見うけられた。

その後二羽のムクドリのうち主に給餌するのは、このうちの二羽だけになってしまった。なぜもう一羽のムクドリが給餌をやめてしまったのか良くわからない。しかし

敵発的に給餌することもあり、営巣木近くにいつも待機はしているのだった。

四 外 敵

クマゲラの親鳥にしてみれば、ムクドリ夫婦は外敵であるが、共通の子供を持つクマゲラ、ムクドリ両夫婦の共通の外敵である侵入者があらわれ、ムクドリがこれを阻止し、また完全に撃退するまで立ち向う姿がよく見られた。六月五日気温も二四、五度くらいまでになり、まずまずの天候であった。営巣木の巢口に面して生えている木にクマゲラ夫婦が採餌へ行くとき、あるいは採餌から戻ったときに使う中継木があるが、この木の頂上近くの幹にクマゲラの雛親が給餌に戻っていた。また営巣木のすぐ五、六mのところにもムクドリがいつも翼を休めるナナカマドの木があり、そこにムクドリが絶えず陣取り、クマゲラの雛を守り居座っていた。

もう一羽のムクドリは、営巣木から二〇mほど離れた木に待機していたが、急に刃りが騒々しくなり、クマゲラの止まっている木をめがけて慌ただしく鳴き叫び、飛びまわらだした。はじめはクマゲラへの牽制攻撃と思っていたら、なんとその木にアオダイショウが地上より七、八mのところまで上り、日光浴をしていたのだった。ムクドリ夫婦はこれに気づき猛然と爪を立て襲

いかかり、六、七回攻撃を加える。アオダイショウは木になんとかへばりついていて、こらえきれず直ぐ下の低木へ落下、わずかに体をささえるように小枝に引っかかっているが、ムクドリ夫婦が止めをさすように攻撃を加えるとアオダイショウはクマイザサの中に落ちて消えた。

この間クマゲラの雛親はジッと幹にしがみつまま、その様子を傍観していた。巢中の雛たちは奥深く潜り、声ひとつ出さずジッとしていた。まったくこのクマゲラの親は姿かたちには似合わず気が弱い。この他に営巣木へかけ登ったエゾリス、巢口へ樹皮やコケ等々を運びこもうとしたゴジュウカラなど、小さな侵入者もあった。しかしこの侵入者たちも、すべてムクドリに撃退されてしまった。

四 嘴が奇形に

嘴の異変を確認(六月七日)したのは、雛もかなり成長してからのことであった。ふ化からおおよそ二十日は経過していたと思われた。雛が成長するにしたがって、だんだんその奇形が目立ち、観察者の間に重苦しい雰囲気支配した。そして三羽の雛が全部奇形であることも分かったが、ことに一番ひどいのは雌の雛で、完全に嘴が交差しており、イスカの嘴に似てなんとも異様な嘴になっている。

さらにもう一羽の雌の雛も奇形を生じているのが分かり、これも交差するほどに變形していた。あとに残った一羽の雄の雛も他の二羽の雛ほどではないが、嘴が開いているときはそれほど目立たないが、閉じるとかなりの狂いを生じているのが良く分かった。また雛三羽全部に嘴の真ん中に黒色に見えるコブ状の物が盛り上がっていた。

この嘴の異状または奇形の発生について次のような原因が考えられている。①ムクドリが与えた餌に病菌性のあるものが含有していた。②先天性奇形であった。③成長過程においてなにかの機に衝激を受け嘴を損傷したなど。そして嘴の中央にあるコブ状のものが、嘴が曲がったことと密接な関係があるのではないかと考えられている。

なおムクドリの運んだ餌は様々であるが次のような餌を与えており、この普通ならとることのない餌も奇形の発生に関係したかもしれない。ミミズ、ガガンボ、トンボ類、ウスバカゲロウ、ハチ、ガ類、甲虫類、鱗翅目、模翅目の幼虫その他。

(4) 巢立ち
巢立ちは六月十四、十五日に行われたようであるが、十四日早朝にムクドリが数回給餌しただけであり、巢口には二羽の幼鳥が在巢していた。その早朝後のことはあいにく観察していたものがおらず、どのよう

表一 家族・その一 ムクドリの関係したクマガラ一家のうごき

月	4 月			5 月			6 月										
うごき	造 巢 活 動 (約 37 日)			抱 卵 (14~15日)			育 雛 (27~28日)										
	4.1	4.10	4.21	5.5	5.19	5.29	6.3	6.5	6.6	6.7	6.9	6.9	6.12	6.12	6.14	6.15	
摘 要	4.1 3 。巢造開始(推定)	。営巣個所発見	たて穴を穿っていた	。産卵(推定) 7	。孵化(推定) 20	。幼鳥二顔だす(クマガラ親、ムクドリ)	。アオダイショウ、ムクドリに攻撃される	。のあたりからムクドリ給餌回数多く	。ムクドリ、クマガラ幼鳥へ給餌(こりに攻撃される)	。幼鳥二顔だす(クマガラ親、ムクドリ)	。ムクドリ小枝状のもの巢穴へ入れる	。度合い激しくなる)	。クマガラ給餌回数とくに少ない)	。ムクドリ、アカゲラを攻撃(午後の)	。クマガラ早期交尾	。ムクドリ二羽でエゾリスを撃退	。クマガラとムクドリ

に巢立つて行ったか確認できなかった。クマガラの巢立ちは親が誘導することが多いが、このクマガラの雛には二組の異った両親があり、どちらの親に従って巣立つて行

二、家族その二

この家族は一九七五年から一九七七年まで、営巣木はそれぞれ異なるが、同じ両親

くのか、かたずを呑んで待つていたところだったのである。一九七七年四月十日時点では一九七六年のクマガラの営巣木には造作の形跡は見られなかった。この営巣木地点から四百mほど離れた地点で、雌のクマガラが採餌中(午前六時頃)であった。

五十二年五月二日、終日雨であったが造作中の雄を確認する。翌日には同じく雄が穴を穿っていた。五月五日気温二十一・五度になり、急ピッチに雄のクマガラが巢中を穿っていた。五月八日はほほ巣造りは完成したらしく、巢中で鈍い音をたてていた。そして五月十一日~五月十三日にかけて産卵したと思われる。五月十四日午後から森へ入ると、ちょうど雌が戻り雄と交番するところであった。おそらく抱卵に入ったと思われる。五月二十七、八日頃ふ化したらしく、その後しばらくの間親鳥は警戒心を強め鳴きもひかえめであった。

六月十二日、巢口に三羽の雛を見る。六月十六日には雌二、雄一と確認でき、ムクドリに育てられた雛よりも体の色つやも良く、元気に鳴いていた。六月二十五日、午前中に一羽巢立ちしたらしく、つづいて同日十四時四十一分雛の幼鳥が巢立ち、親鳥に誘導されていた。翌二十六日、残る最後の二羽、雄が巢口から落ちるように巢立ちして行く、この雛も親鳥に誘導され、森

表一 2 ムクドリ、クマガラ給餌状況(回数及び間隔)

観 察	月日	5.29	6.3	6.5	6.6	6.7	6.9	6.10	6.12	6.13	6.14
	時間	13.00~ 14.30	9.00~ 17.00	9.00~ 17.20	8.00~ 16.20	14.00~ 17.30	5.00~ 7.00	5.30~ 6.50	5.40~ 6.40	5.30~ 6.40	5.30~ 6.30
クマガラ	合	2回 105分ごと		4回 125分ごと	5回 100分ごと	2回 104分ごと	1回		3回 21分ごと	4回 17.5分ごと	
	早	2回 105分ごと		8回 62.5分ごと	3回 166.6分ごと	2回 87分ごと	1回		2回 7分ごと	1回 7分ごと	
	計	4回 52.5分ごと	9回 53.3分ごと	12回 41.6分ごと	8回 62.5分ごと		2回 53分ごと	0	5回 8.3分ごと	5回 7分ごと	
ムクドリ		26回 18.5分ごと	31回 16.1分ごと	42回 11.9分ごと	24回 8.7分ごと	7回 17分ごと	1回	6回 8分ごと	5回 9.4分ごと	2回 8分ごと	
備 考			給餌の近 たつたゲ マがドリ クマガラ に追われ た回数 2回	14回	9回	11回	1回	4回	2回	巣を飛び が前度抜 きの一び る	

※ ただし、観察時間に関係なく、各日の平均給餌間隔の時間をあらわしたものである。

表一 3 家族その二のうごき

月	4 月	5 月	6 月
うごき	造巢活動 約40日	抱 卵 14~15日	育 雛 約30日
摘 要	5.2 5.3 5.5 5.8 。営巣所確認(雨) 造作中(雨) 造巢続行中(晴)	5.12 5.14 5.22 産卵(推定) 抱卵型に入る	5.28 6.4 6.5 6.16 6.19 6.25 6.24 7.24 給餌回数増大しているようだ(雄のクマガラ激しく鳴く) 巣口近くでカラスささわく 雌抱卵に入り雄採餌に行く 孵化(推定)十六時四十五分 抱卵に入っているため静かである 雄二、雌一(確認) 給餌回数増大しているようだ 雌給餌おちつきない、雌短時間給餌 。雄二、雌一(確認) 二十六日九時二十分過ぎ雄巣立つ 二十五日十四時四十一分雄巣立つ 親の呼び出し鳴きさかに行う 巣立後の幼鳥の声をきく 二十一日九時二十分過ぎ雄巣立つ 二十五日十四時四十一分雄巣立つ 親の呼び出し鳴きさかに行う 巣立後の幼鳥の声をきく 二十一日九時二十分過ぎ雄巣立つ 二十五日十四時四十一分雄巣立つ 親の呼び出し鳴きさかに行う

深く巣立っていった。
おわりに 一九七二年度も野幌では二組のつがいから三羽ずつ計六羽の雛が巣立ちましたが、特にムクドリの介入したクマガ

ラの育雛状況は、学術的にもかなり珍らしい事例だったと思います。こうしたことは専門の方や多くの方によく見ていただくべきものでしたが、静かに守られている森の

奥の育雛場所を乱すことをためらっているうちに、巣立ちがすんでしまいました。関心を持つ方々には申しわけない気持を抱いておりますが、一方、クマガラや森のためには、あまり囁りを人声で乱さないですみ、はっとしてあります。
野口正男・キヨ、森 拓人、馬場錬成、林 大作、高田政幸、梅木賢俊、野村裕郎、萩 千賀、羽田恭子、平井サチ子、土屋文男、黒沢 隆、赤坂 猛、宮木雅美、伊藤正清、柳沢信雄・千代子、藤林忠雄・勝代、村野紀雄・道子。(順不同)
今年度(一九七三年)も野幌森林公園では、二組みの営巣が観察されました。一組は営巣途中で巣を放棄しましたが、一組は大勢の人に見守られながら巣立ちを迎えました。しかし、このクマガラ一家は母親が、何者かに(多分カラスに)殺されたため、育雛の中途から父親だけで育てあげるといふ状況にいたりました。詳しくは、また多くの方の記録をまとめる形で報告したいと思っております。今後とも野幌にはいられてクマガラをご覧になったかたはグループにご一報くださることをお願い申し上げます。(自然保護課)